

『サントスの御作業の内抜書』における 「ヒトリ」と「イチニン」について 小鹿原 敏夫

(0) はじめに

現代の口語では四人までの人数を数える際に「ヒトリ、フタリ、サンニン、ヨニン」と唱えるのが最も一般的であろう。「ヒトリ、フタリ、ミタリ」が伝統的な和語の数え方で「イチニン、ニン、サンニン」が漢語での数え方であるので「ヒトリ、フタリ、サンニン」はこの二つの数え方の組み合わせである。そしてそれに和語と漢語の混淆形「ヨニン」(ヨ+ニン)を加えたものが四人までの現代口語の一般的な数え方である。しかしローマ字キリシタン資料では基本的に「イチニン、ニン、サンニン、ヨツタリ」と四人までの人数を表している(【表 1】)。そしてヒトリ、フタリは限定的な使用がみられるに留まる。この数え方は、文語的といわれる『Sanctos no Gosagveo no Vchinqigaqi (サントスの御作業の内抜書)』(1591 以下『サントスの御作業』)から、それよりも口語的であるとされる『天草版平家物語』(1592)と『エソポのハブラス』(1593)でも共通している⁽¹⁾。

【表 1】キリシタン資料の一人から四人の数え方

一人(イチニン ichinin*、ヒトリ fitori) *ychinin と綴る。

二人(ニン ninin、フタリ futari)

三人(サンニン sannin)

四人(ヨツタリ yottari)

ロドリゲスの『日本大文典』(1604)をみると人を数える際には一人(ヒトリ)、二人(フタリ)、四人(ヨツタリ)という三種の特殊な読み方があることが記されている(邦訳『日本大文典』: 817-818)。しかしヒトリとイチニン、そしてフタリとニンとの使い分けについては特に説明していない。

本稿が対象とした『サントスの御作業』は島原半島の加津佐で刊行されたキリシタン資料で、現存する最古のローマ字表記の日本語版本である。同書は八折型、二巻一冊構成で、本文だけで 31 篇(巻① 17 篇 294 頁、巻② 14 篇 340 頁)から成る浩瀚な版本である(このほか 72 頁の言葉の和らげと正誤表なども含まれている)。この孤本はオックスフォード大学ボードレイ図書館に蔵されている。表題にある「御作業」(Gosagveo)とは聖人の生涯を指す。その大半はキリスト教に命を捧げた聖人の殉教伝であるが、殉教者ではない旧約聖書のジョセフとその兄弟の話なども収録されている。また巻②の後半部では「マルチレス」と名付けられた迫害の歴史、教義に関する事柄が語られている。

『サントスの御作業』はもともと西洋の言葉で書かれていた聖人伝と殉教伝を日本語に訳した翻訳文学である。翻訳に携わった人物はイルマン・パウロ（養方パウロ）とその息子のヴィセンテという日本人イルマンであったことが同書に明記されている。この二人は外国人司祭が訳した不完全な日本語を文語文に仕上げたと考えられている（『サントスの御作業』翻字・研究篇 1979：366）。養方パウロとヴィセンテが各篇の担当を決めて翻訳を行ったことが『サントスの御作業』の本文のところどころに記されている。これによると巻①と②を合わせて 31 篇のうち、パウロは 4 篇、残りの 27 篇をヴィセンテが担当したとみられる。

また『サントスの御作業』と関連した資料としては、当時の日本イエズス会に属していたポルトガル人会士マノエル・バレット（Manoel Barreto 1564-1620）が日本で書写した写本『サントスの御作業』（通称バレット写本）がヴァチカン図書館に蔵されている。バレットの写本には版本との重複部分もあるが、それにはない聖人伝も書写されている⁽²⁾。しかし本稿では『サントスの御作業』（版本）だけで十分な数の用例があると考え、調査を版本に限定することとする。なお日本語の翻字は『サントスの御作業、翻字・研究篇』（福島 1979）に拠る。

さて実際に「サントスの御作業」巻①、巻②に分けて「一人～四人の読み方」用例数を挙げると【表 2】のようになる。なお（① 205：5）は「サントスの御作業、巻①、205 頁、5 行目」を意味する。

なお参考のため『天草版平家物語』と『エソポのハブラス』の用例数を【表 2'】に挙げる。

【表 2】『サントスの御作業』（1591）における一人～四人の読み方

	巻①	巻②	計	用例
ヒトリ	7	6	13	「ヒトリも残らず失せられけるに」（① 246：13）
イチニン	56	56	112	「乞食イチニンを見付け給ひ」（① 273：12）
フタリ	1	0	1	「御フタリの御子いとけなくましませば」（① 280：13）
ニン	80	38	118	「ニニンの旅人は未だ思ひよらずして」（① 284：3）
ミタリ	0	0	0	
サンニン	12	11	23	「或る人サンニンの知音を持ちたるに」（① 261：10）
ヨツタリ	4	1	5	「娘ヨツタリを持ち給ふと聞こえたり」（① 126：3）
ヨニン	0	0	0	
シン	0	0	0	

【表 2'】『天草版平家物語』と『エソポのハブラス』における一人～四人の読み方

	『天草版平家物語』	『エソポのハブラス』
ヒトリ	6	3
イチニン	74	16
フタリ	4	1
ニン	38	17

ミタリ	0	0
サンニン	26	0
ヨツタリ	5	0
ヨニン	0	0
シニン	0	0

一人、二人の場合は圧倒的に漢語数詞イチニン、ニンと読まれる場合が多いが、ヒトリ、フタリも散見する。三人に関しては、古代からあるミタリという和語は全く見当たらず、もっぱらサンニンが使われている。四人に関しては、『日本大文典』（邦訳『日本大文典』：766）によると、シニンは「死人」に通じるということで避けられ、ヨツタリが使われるという⁽⁹⁾。そしてヨニンの読みも全く見られない。なお人数を尋ねるときは和語の「イクタリ」が用いられるが『サントスの御作業』には1例だけみられる（巻① 205：5）。

【表2】で明らかのように「三人」（サンニン）と「四人」（ヨツタリ）の読みは一貫しているが、「一人」の場合は、漢語数詞イチニンが112例に対し、和語数詞ヒトリも13例見られることで、何らかの使い分けがあった可能性がある。これに関して先学はキリシタン資料ではヒトリ、フタリは「単独で」「二人一緒に」といった副詞のような意味で使われることが多いと指摘されている（安田 1991：30）。しかし『サントスの御作業』ではニン 118例に対し、フタリは1例しか見られないことで「二人」の読み方の検討は困難と考える。したがって本稿では「一人」のヒトリとイチニンの読みにおいて意味の上での使い分けがあったかどうかを検討することとする。

(1) 『サントスの御作業』におけるヒトリとイチニンの使い分けについて

次に『サントスの御作業』にある一人（ヒトリ）と読む13例をあらあら性格別に整理し【表3】に列挙した。

【表3】『サントスの御作業』における一人（fitori）

- (a) 王子御一人（von fitori）もましまさねば（① 239：7）
- (b) 流浪の御一人身（von fitori mi）なれば（① 282：9）
- (c) 難儀の折節我一人（fitori）にては申し開きがたければ（① 261：19）
- (d) 科を犯せる者一人（fitori）我等が所従と定むべし（② 37：1）
- (e) 一人（fitori）も残らず失せられけると（① 246：13）
- (f) 乞食二人（ninin）立ち居たり、一人（fitori）は盲目、今一人（fitori）は癩瘡全体に満ちくさりたる者なり（① 250：2）
- (g) デゼルトへ一人（fitori）分け入り給ふに乞食一人（ichinin）を見付け給ひ（① 273：12）
- (h) その身一人（fitori）の狼藉か？（② 17：10）
- (i) 一人（fitori）も国に帰すまじい（② 27：11）
- (j) 迎ひに一人（fitori）は帰すとも、九人はここに籠居なせと（② 27：12）

(k) 一人一人 (fitori fitori) に御涙を流させ給ふぞあはれなる (② 39 : 11)

はたしてここにみられる一人 (ヒトリ) と一人 (イチニン) の読みには何らかの使い分けの根拠があるのだろうか。それを検証するために【表 3】の一人 (ヒトリ) と同じような一人 (イチニン) の用例を『サントスの御作業』から探してみた。以下 (I) ~ (X) において【表 3】の (a) ~ (k) に似た用例を列挙した。

(I) (a) 「王子御一人 (von fitori)」(① 239 : 7)、(b) 「流浪の御一人身 (von fitori mi)」

(① 282 : 9) の「御一人」(von fitori) に対して、(go ichinin) と読む用例ははるかに多い。また (b) は「一人身」よりも『邦訳日葡辞書』に倣って「独身 fitorimi」と翻字するほうがふさわしいのではないだろうか。「独身 (fitorimi)」は『邦訳日葡辞書』では「よるべもなく、援助してくれる者もない人」と語釈されている。

○十二人のアポストロの中の御一人 (go ichinin) なり (① 64 : 12)

○ただ御一人 (go ichinin) テンボロへ入り給ひて (① 69 : 23)

○今御一人 (go ichinin) のジャコブよりも早くアポストロになり給ふが故に (① 95 : 9)

○十二人の御弟子の中の御一人 (go ichinin) なり (① 122 : 8)

○今御一人 (go ichinin) を渡し給はんとて (① 280 : 16)

○又御一人 (go ichinin) 師子王の取りて行きけるをば (① 281 : 18)

○その中御一人 (go ichinin) は悪逆無道なるローマのさぶらひに (② 234 : 10)

(II) (c) 「我一人 (vare fitori)」(① 261 : 19) に対して「我一人 (vare ichinin)」という用例は見つからないが、それに近い「汝一人 nangi ichinin」の用例がある。

○我は只汝一人 (nangi ichinin) を持ちたり (② 249 : 22)

(III) (d) 「科を犯せる者一人 (fitori)」のような「ある人物 fitori」の形式に対して、多くの「ある人物 ichinin」の用例がある。

○そこに若き侍一人 (ichinin) (① 46 : 12)

○盲目一人 (ichinin) あり (② 153 : 2)

○サントを見知りたる人一人 (ichinin) あつて (② 265 : 12)

○善人の娘一人 (ichinin) あつて (② 312 : 1)

(IV) (e) 「一人 (fitori) も残らず」(① 246 : 13) に対して「一人 (ichinin) も残らず」の用例もある。

○十日の中に一人 (ichinin) も残らず死するなり (① 42 : 17)

(V) (f) 「乞食二人 (ninin) 立ち居たり、一人 (fitori) は盲目、今一人 (fitori) は癩瘡全体に満ちくさりたる者なり」(① 250 : 2) このように総勢が二人ありとし、それぞれを紹介する形式でも ichinin と読む用例がある。

○二人 (ninin) あり、一人 (ichinin) をばへプロニヤといひ、今一人 (ichinin) はプロ

クラといふなり (① 210 : 11)

○この二人 (ninin) の兄弟,一人 (ichinin) はプロト,いま一人 (ichinin) はジャシントと申す (② 118 : 20)

○二人 (ninin) の若き男あり.即ち互に一門なり.一人 (ichinin) はロウレンソ,今一人 (ichinin) はヴィセンテといふなり (② 148 : 8)

(VI) (g) 「デゼルトへ一人 (fitori) 分け入り給ふに」 (① 273 : 12) の fitori は「単独で」という意味の副詞的用法といえるだろう。これは聖者ジョサハツが誰も伴うことなく砂漠に足を踏み入れた場面である。これと同様に誰かが単独で来る、あるいは向かうという場面で一人 (ichinin) を用いた用例もある。特に「(砂漠に) 分け入り給ふ」 (① 273 : 12) と「(敵陣に) 切つて入り給ふ」 (② 172 : 16) はよく似た表現と考えられる。

○門に修行者一人 (ichinin) 来たつて (① 174 : 5)

○只一人 (ichinin) 馳せ向はるるものなり (② 172 : 14)

○只一人 (ichinin) 真中に切つて入り給ひ (② 172 : 16)

(VII) (h) 「その身一人 (fitori)」 (② 17 : 10) に対して「我が身一人 (ichinin)」という用例がある。

○一切のキリシタンを我が身一人 (ichinin) の古敵,当敵のごとくに心得 (① 13 : 5)

(VIII) (i) 「一人 (fitori) も国に帰すまじい」 (② 27 : 11) に対し、同様の強意のための「一人 (ichinin) も」という用例もある。

○燃え立つマルチリヨの望みを以て一人 (ichinin) も落ち失せず (② 216 : 17)

○その中一人 (ichinin) もうけがはざるが故に (② 311 : 4)

(IX) (j) 「迎へに一人 (fitori)」 (② 27 : 12) に対して「迎へに一人 (ichinin)」という用例は見当たらない。これは旧約聖書の創世記の一節で、エジプトで高官となったユダヤ人ジョセフが我が正体を隠し、自分の兄弟に九人の人質を残して、一人だけ故郷に戻って良いという条件を出す場面である。結局、ジョセフは人質になるのはシメオンという兄弟だけで良いと裁定を下し、次のような一節がある。ここでは一人 (ichinin) が使われている。

○兄弟のうちよりシメオン一人 (ichinin) 残し置き籠者と定め給ふなり (② 29 : 2)

(X) (k) 「一人一人 (fitori fitori)」 (② 39 : 11) に対して「一人一人 (ichinin ichinin)」という連語は見当たらない。しかし「一人二人 (ichinin ninin)」の用例はある。

○一人二人 (ichinin ninin) のみならず,七人の子を捧げらることは (② 327 : 12)

○一人二人 (ichinin ninin) のみならず,一万人の大将 (② 331 : 1)

また「一人 (fitori) づつ」は全く見られないが「一人 (ichinin) づつ」には多くの用

例がある。

- ビスポー一人 (ichinin) づつを据ゑ置かせられ (① 6 : 21)
- 一人 (ichinin) づつ御前にかしこまり (① 244 : 21)
- ことさら一人 (ichinin) づつを選びみすぐつて (① 286 : 7)
- 兄弟十人一人 (ichinin) づつ御顔を顔にあてさせ給ひ (② 39 : 11)
- 又一人 (ichinin) づつ責められ給ふばかりにあらず (② 202 : 4)
- サンシメヨンは一人 (ichinin) づつの側に近づき給ひ (② 311 : 6)

このように (I) から (X) までの検討を踏まえると『サントスの御作業』においては、一人 (ヒトリ) と一人 (イチニン) のどちらかを使わなければいけなかったという意味の上での必然性は薄いといえるのではないか。

(2) 『サントスの御作業』の執筆者との関係について

実は【表 3】に示された一人 (ヒトリ) の読みは巻①の末尾、巻②の冒頭の篇に集中している。巻①では「サンバルランとサンジョサハツの御作業」(巻① 239-274) に 7 例中 6 例が見られる (イチニンは 5 例見られる)。**【表 3】**の分類では (a)、(c)、(e)、(g) 各 1 例と (f) の 2 例である。さらにそのすぐ後の「サンエウスタキヨの御作業」(巻① 275-294) の中でもう 1 例、(b) が見られる (イチニンは 9 例見られる)。また本書全体で唯一の二人 (フタリ) の例 (① 280) も「サンエウスタキヨの御作業」の中に見出される。

巻②の一人 (ヒトリ) の読み 6 例すべては「パトリアルカ・ジョセフの御作業のこと」(巻② 3-42) に集中している。**【表 3】**の分類では (h)、(j)、(d)、(k) である (j) と (k) は 2 例を含む (イチニンは 17 例見られる)。

『サントスの御作業』にはイルマン・パウロ (養方パウロ) とその息子のヴィセンテという二人の執筆者が存在したことが知られる。『サントスの御作業』巻①の末尾に「右二つの御作業はイルマン Yofô Paulo の翻訳なり」(① 294) とある。したがって巻①の末尾の「サンバルランとサンジョサハツの御作業」(巻① 239-274) と「サンエウスタキヨの御作業」(巻① 275-294) 二篇で「ヒトリ」を多用した執筆者は養方パウロということになる。

養方パウロが翻訳したと『サントスの御作業』に記された箇所がもう二か所ある (② 108、② 140)。それらによれば「サントアレイショの御作業」(巻② 86-108) と「サンタエウゼニヤの御作業」(巻② 109-140) も養方パウロの手になる。しかしこれら二篇には【表 4】と【表 5】で示すように、イチニンはあるがヒトリは全く使われていない。

【表 4】「サントアレイショの御作業」にみられる一人 (イチニン)

- 御子を一人 (ichinin) 望み給ふ (② 88 : 7)
- 男子を一人 (ichinin) くだされよと (② 88 : 14)
- その役者を一人 (ichinin) 定められ (② 99 : 16)

「サンタエウゼニヤの御作業」にみられる一人 (イチニン) は以下の通りである。

【表 5】「サンタエウゼニヤの御作業」にみられる一人（イチニン）

○この二人（ninin）の兄弟一人（ichinin）はプロト、いま一人（ichinin）はジャシントと申す（② 118 : 20）

○一人（ichinin）の御子はカルタゴといふ国の司に備へ申され、今一人（ichinin）はアフリカの中の御分国数十個国の総守護に定められ給ふなり（② 134 : 1）

このように【表 4】【表 5】で明らかなように、イチニンではなくヒトリを使う機会があったのに養方パウロがあえて使わなかったことは、ヒトリの読みを使わない息子ヴィセンテのスタイルに合わせたのであろうか。しかし、もうひとつ多くの一人（ヒトリ）の読みが見られる「パトリアルカ・ジョセフの御作業のこと」（巻② 3-42）を翻訳したのはヴィセンテである。したがって養方パウロとヴィセンテのいずれかが、ヒトリの読みを好んだとはいえない。いずれにせよ巻①の末から巻②の冒頭の篇に一人（ヒトリ）の読みが集中しているということは、翻訳作業の折り返し地点で「一人」の読みに関して養方パウロとヴィセンテに迷いが生じたのであろうか。

(3) おわりに

『サントスの御作業』においてヒトリとイチニンの使い分けの根拠を説明することは難しい。ヒトリとイチニンの両方に「単独で」という副詞的用法がみられ、また待遇表現としてのヒトリとイチニンの使い分けを認めることも困難である。ただ特定の篇に「ヒトリ」の用例が偏っているということを考慮すると、文体のスタイルの選択であった可能性があるかもしれない。しかしこれら「ヒトリ」の用例の多い篇（たとえば「サンバルランとサンジョサハツの御作業」巻① 239-274）を他の篇と比較しても、他の篇よりも和語が多用されているとか、口語的であるということは認められない。

『サントスの御作業』ではフタリの読みは 1 例（① 280 : 13）しかないが、『天草版平家物語』には次の 4 例がみられる。

○二人（フタリ）の人は例の熊野詣をして留守で（巻① 73 : 7）

○二人（フタリ）の人のもとへは都からことつて文ともが（巻① 74 : 7）

○若い二人（フタリ）の娘どもにおくれたらば（巻② 102 : 14）

○二人（フタリ）の娘とともにひたすに念仏申して（巻② 103 : 17）

『天草版平家物語』のなかに「二人（ニンニ）の人」あるいは「二人（ニンニ）の娘」という用例はないが、多くの「二人（ニンニ）の女房」（巻④ 301 : 19,355 : 23,357 : 1,357 : 9 等）があり、また「二人（ニンニ）の侍」（巻④ 394 : 2）と「二人（ニンニ）の人々」（巻④ 345 : 4）の用例もある。したがって上の 4 例で「二人」をどうしてもニンニではなくフタリと読むべき理由は薄いように思える。

このように書き手の恣意的な要素が大きいのであれば、日本語を学ぶ外国人宣教師に当時の日本語教師はヒトリとイチニン、そしてフタリとニンニの使い分けをどのように指導していたのであろうか。それは例外が多いものの、和語の方が打ち解けた身内の会

話で使われやすく、漢語は外向きの場面で使われやすいという傾向があるとだけ教えていたのではないだろうか⁽⁴⁾。『エソポのハブラス』に「一人」と「二人」を多用した次のような寓話（『エソポのハブラス』481：1-14）がある。

二人（ninin）同道して行く事。

二人（ninin）同じやうに歩んで行くところに、一人（ichinin）

斧を見付けて、拾ひ取るところで、ま一人（ichinin）の

言ふは、「そなた一人（fitori）のにはせまじい。ただこれは二人（futari）のにせうず」と。されども、一円同心せなんだ。

さうあって、後からその主が走って来て、持った斧を

「これは余がぢや」と言うて、奪はうとして、いさかふところで、斧を拾うた者、「なう同心した人、なぜにそなた

は力をお添へやらぬぞ」と言へば、ま一人（ichinin）が

答へて言ふは、「ただ貴所御一人（go ichinin）のでござらうず」と。

下心。

よい時に友にせぬ人をば、悪事の時も

伴ふことはなるまい。

『エソポのハブラス』は教化の役割もあったが、それ以上に外国人宣教師が日本語を学ぶための読本として編まれたものであろう。したがってそこには教育的配慮があるはずである。この寓話の狙いはイチニンとヒトリ、そしてニンとフタリの使い分けに指針を与えることではなかっただろうか。つまり日本語学習者に「一人、二人」にはそれぞれ異なった二種類の言い方があることを教え、そして漢語の「イチニン・ニン」が多少堅苦しい言い方で地の文で使われることが多いのに対し、和語の「ヒトリ・フタリ」は会話文に使われることが多いことを例示しているのではないか⁽⁵⁾。しかし、この使い分けはそれほど強い拘束力を持たなかったようだ。『エソポのハブラス』の中でも地の文で「ヒトリ」が使われている例がある。

○このことを「いかに」と問はせらるれども、一人（ヒトリ）として明らめ申すものがなかったによって（『エソポのハブラス』434：13）。

そして最後の台詞が「ただ貴所御一人（go ichinin）のでござらうず」とゴイチニンであるのは、同行していた知己を「貴所（あなた様）」とあえて他人行儀に呼びかけ、馬鹿丁寧なものの言いをすることによって「俺はもはやお前の友達ではないぞ」という皮肉を表現していると考えられる。

[注]

- (1) 『邦訳日葡辞書』ではこのなかのヒトリ、イチニン、フタリと、それに加えイクトリ（幾人）に項目が立てられ、以下の様な語釈がある。

Fitori ヒトリ（一人）一人の男、または一人の女。

Ichinin イチニン（一人）男、あるいは女を数える言い方。

四人になると、Yottari（四人）と言うのが普通であって

Xinin（しにん）とは言わない。

Futari フタリ（ふたり）二人の男、あるいは女。

Icutari イクタリ（幾たり）何人か？など。

(2) 『サントスの御作業』の版本と写本の関係については川口 2001 を参照されたし。

(3) ただし『天草版平家物語』に「さうしにん（三四人）」（巻① 24 : 4）の例がある。

(4) 『日本大文典』（1956 : 5）に‘こゑ’（音読み）の多量に混じった日本語は荘重で、日本人は普通文書に用い、重々しい身分の者とか学者が談話に用いるとある。

(5) 「二人同道」の寓話と対になる寓話として「憂き時連れぬ友をば、友とするな」という真逆の教訓を持つ「二人（ニニン）の知音の事」（『エソポのハプラス』：470-471）がある。そこでは熊に襲われ「一人（イチニン）は木に上り、いま一人（イチニン）は熊と戦うた」とある。

[参考文献]

『サントスの御作業』：影印版 勉誠社 1976

『サントスの御作業』：翻字・研究篇 福島邦道 勉誠社 1979

『邦訳日葡辞書』：土井忠生、森田武、長南実編訳。岩波書店 1990

『日本大文典』：J.ロドリゲス著、土井忠生訳注 三省堂 1956

『天草版平家物語語彙用例総索引』：（全 4 巻）巻①が影印・翻字篇 近藤政美ほか編 勉誠出版 1999

『エソポのハプラス』：本文と総索引（全 2 巻）大塚光信、来田隆編 清文堂出版 1999

川口 2001 : 川口敦子「サントスの御作業の稿本：パレット写本の注記より」『京都大学国文学論叢』2001.11.30

安田 1991 : 安田尚道「人数詞」『国語学』164 集 1991.3.30

（おがはら としお・京都女子大学文学部非常勤講師）